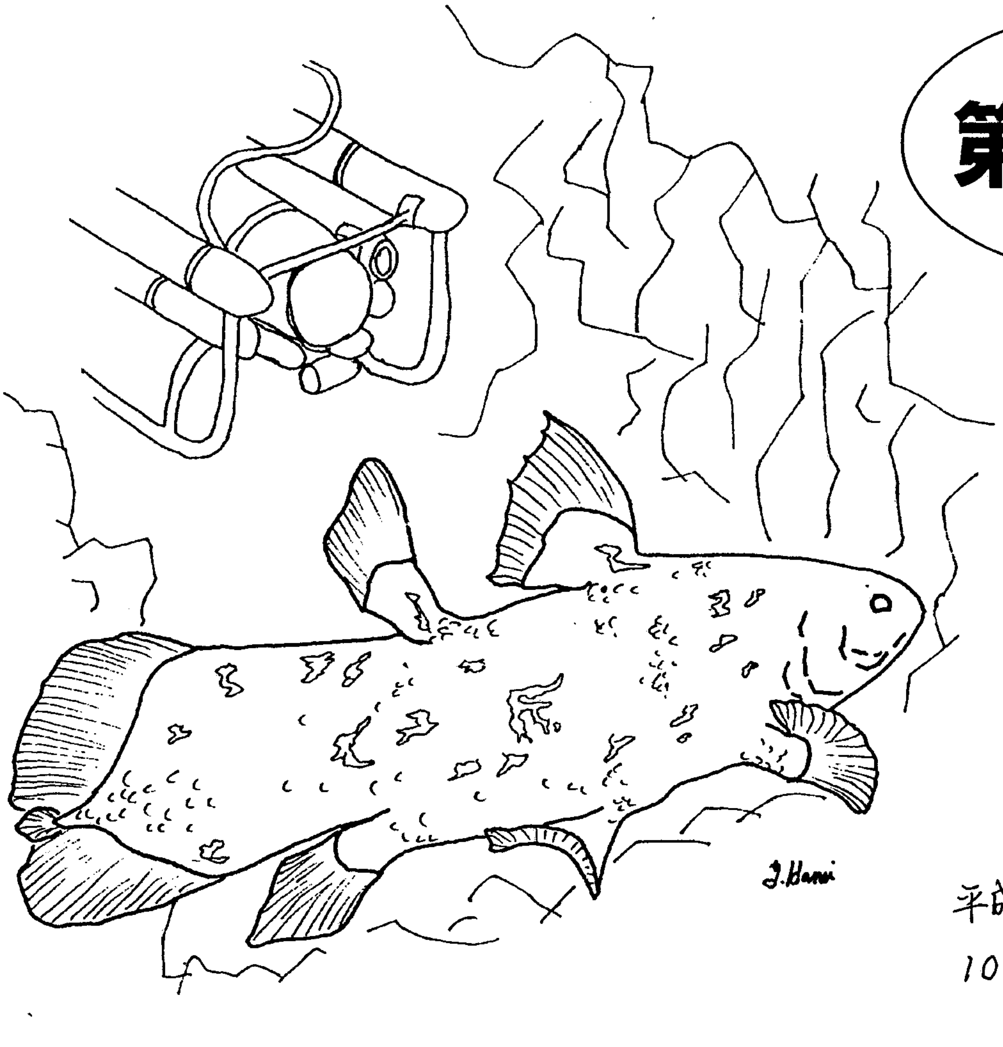
北スラウェシ日本人会
NOTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第12号



平成18年(2006)
10月発行

目　　次

1	巻頭挨拶	後藤　昭	1
2	ニューズウィーク日本版	玲子ダウニー	2
3	ブナケンのタルシウス	玲子ダウニー	4
4	最近改めて思ったこと	勝見　恵理	5
5	ダイバーが愛する南海のリゾート	ニューズウィーク誌より	6
6	インドネシアシーラカンス	羽根井義博	8
7	インドネシアに接して４０余年	石野	１３
8	老後に備え	今泉　宏	１６
9	戦争と鰹節	川口　博康	１８
１０	作文と識字	上杉　裕子	２２
１１	各地のようす(2)　ミナハサ	ウインディ・サンゲル	２３
１２	インドネシアの珊瑚礁	長崎　節夫	２５
１３	入会の挨拶	三浦雄一郎	２９
１４	総領事館からのお知らせ	竹森　祥則	３０
１５	編集後記	長崎　節夫	３３
１６	会員名簿		３５

北スラウエシ日本人会の皆様へ

在マカッサル日本国総領事
後藤　昭

今年も後半に入ってまいりましたが、皆様におかれましては、ご健勝のことと存じます。

インドネシアでは、今年も自然災害を含め様々な事件・事故が発生していますが、皆様が無事に滞在されていることが、何よりです。

ご承知のようにインドネシアは広大な領域と多数の人口を有しており、国家として安寧秩序を維持していくことには、それ相応の困難が伴います。加えて、自然災害が起きますと、その困難さは計り知れません。テロ発生に対する予防策は可能であっても、自然災害に対する予防策はなかなか難しいというのが現実です。

前回の貴会会報でも言及しましたが、今、インドネシアで最大の懸念とされるものの一つは、鳥インフルエンザ問題であると考えます。ご承知のようにインドネシア人の多くは、鳥インフルエンザ感染にあまり危機感を有していないように見受けられれます。これは、大変残念であると同時に、由々しきことであると考えます。貴会の今回会報の中に、鳥インフルエンザ対策に関する特別掲載がありますので、これを参考にされて自分なりの自己防衛策を講じて頂ければと思います。特別掲載の中にも言及されていますが、基本中の基本は、外出から戻ったら手洗い（出来れば石鹸で）・うがいの励行と、死んだ家禽には絶対に近寄らない、触れない。高熱等の症状が出た場合には、可及的速やかに最寄りの信頼できる医者・病院で診察を受けるということです。詳しくは特別掲載をお読み下さい。

以上、明るい話題ではありませんが、「備えあれば憂いなし」という格言の如く実行されることを願っています。

そして皆様が今年も平穏無事に過ごされることを切に願っています。

NEWSWEEK ニューズウィーク日本版

「海外で暮らす」2006 年 8 月 16・23 日 夏季合併号に、マナド(メナド)の邦人二人が登場！！

玲子・ダウニ

今年の夏、素晴らしいニュースが、一部のメナド邦人のメールでやりとりされていました。
それは、あの有名雑誌 NEWSWEEK(ニューズウィーク)が、メナド(マナド)の邦人二人を特集で取り上げたニュースでた。特集タイトルは
「海外で新しい人生 海外で暮らす」ーどこか懐かしくて、実に多様なアジアの国々。「海外で暮らす」シリーズ、今年にアジアの厳選 12 都市で心豊かに生きる人たちを紹介。
メナド(マナド)は、「ダイバーが愛する南海のリゾート」(当雑誌 49 ページから)ということで、ダイビングセンタータラサでインストラクターとしてダイビングの仕事に従事している、日本人会でもお馴染みの勝美恵理さん(通称エリちゃん)と、日本人会では懇談会幹事(飲み会幹事？)を引き受ける、ブナケン島で小型ネイチャーリゾートを経営する私、玲子・ダウニーの邦人女性二人が堂々紹介されました。 再び長崎さんの、「日本で強くなったのは本当に女性だけだ...。」というため息が聞こえてきそうですが(笑)。

そもそもの発端は、ニューズウィーク日本版を発行している、(株)阪急コミュニケーションズのニューズウィーク日本版編集部の井口景子さんから、エリちゃんの所に連絡が入り、エリちゃんが私にも連絡をくれて、在住邦人二人の取材が決定。
もともとダイバーではない井口さんですが、
「メナドにはなんとなく縁があって、昔から知っていました。言語学をやっている友人が、メナド周辺の現地語の記述で博士論文を書くとかいうことで、よくそちらに調査に行っていて、そのたびに「ダイビングのために行くなら最高の場所なんだけどねー」という話を聞いていたのです。 それから、10 年以上前にアメリカにいたときから親しくしている華僑系インドネシア人の友人兄妹がいるのですが、彼らの実家がメナドにあって、是非遊びにおいでよとよく言われていました。毎年この特集の都市を選ぶ作業をするたびに、メナドを取り上げたらいいのにと思いつつ、アジア枠が少なくてなかなか実現しなかったのですが、今回はアジアの街だけを紹介するということになり、この機会にぜひ、と思ったわけです。」
十数年という長い年月の間、深い海底に細く静かに横たわっていた運命の糸が、遥かな日本から急にたぐり寄せられるがごとく、今年 2006 年初夏、ようやくエリちゃんのところに 1 通のメールが飛んできたというわけです。

「頑張っていると、面白いこともある」 それが、この雑誌の掲載号を手にした時の、私の一番の感想でした。
ここの海に惚れ、甘い夢だけを見てインドネシアの片田舎ともいえる、電気も水も満足にない、電話線もない島、ブナケン島に完全移住して 7 年半。ただ居住するわけにもいかず、夫婦でダイビングリゾート経営で食べていこうと決心したまでは良かったけれど、日々ヒマラヤのようにそびえ立つ現地住民との間のカルチャーショック、建築技術レベルの大きなギャップ、文明生活の欠如(笑)、気候、食事環境、自然との戦い。気づかないうちに体力を消耗しきる暑さになかなか慣れない体といい、都会育ちの私にとっては、夢のパラダイスどころか、人生が正に"イバラの道"に。最初の 1 年間は、こんなハズじゃなかったと泣き、現状をなかなか受け入れられずに腹を立て、つくづく自分の甘さを思い知らされる日々。とはいえ、もはやこの国から逃げ出す資金もなく。

「(この土地で日本人が)絶対に成功するハズがない。」と在住邦人の方や、この土地で既に痛手を受けた日本の投家たちや旅行代理店から、同情を通り越して批判めいたコメントが早々に聞こえてきても、当時はとにかく必死。会社一員としての仕事も時間の管理もしたことのない現地の人たちに、お給料を払って来てもらい、ゼロから全てを教えて作業の繰り返しを続けてきました。「英語は特に習うつもりはない。」と言い切る彼らに代わり、現地語を、彼らのおしゃが集中する台所で聞いて覚え、なんとかコミュニケーションもとれるようになりました。
数々の問題を乗り越えようやく宿らしくなってくると、今度は他のリゾートからの縄張り争い的ポリティクスまで始まり…。夢見た南の島のパラダイスに住むのも決して楽なことじゃありません。
つきなみな言い方ですが、強靭なポジティブ精神を持つパートナーであるラフがいなければ、深刻に考えがちなタイプのの判断だけでは、ここまでやって来ることは不可能でした。
こうして日々戦ってきた島での波乱万丈生活。 今では、いたって普通出身の?私達の生き方に共鳴、応援してくれるストの方々が日本各地、海外にもいらっしゃいます。 今でもカルチャーショックや外部からのポリティクスがなくなったわけではありませんが、それらが原因で始まる夫婦喧嘩において、ラフも海にモノを投げることはなくなりましたし、私も彼に向かてモノを投げつけることもなくなりました。ある程度のことは笑ってすませる余裕も出てきた、というところでしょうか(笑)。

昨年の夏はテレビ朝日の「ポカポカ地球家族」にも登場させてもらい、今年の4月には、日本のスターバックスのフリーペパー情報誌(全国版)「スターバックスプレス」インドネシア特集にも協力、登場させていただきました。
皆様もご存知のとおり、この国は観光業にとっては致命的な、テロ、地震、津波と、常に不安定な話題がつきない国てし、ただでさえ日本からの直行便がないため、まだまだ一般には馴染みのない場所。それでもひたすらメナド(マナド)の安の良さ、ブナケン島のサンゴ礁の海の素晴らしさ、この海の持つ底力を、こうしたメディア、ダイビング雑誌などで根気紹介。雑誌上で旅行代理店が広告を組んで作り上げる"注目の行き先ブーム"にのって、メナド(マナド)は今やダイバの間で知らない人はいなくなったと言っても良いくらいのデスティネーションになりました。
今、ビジネスのほうはマイペースながらも軌道に乗りつつあり、今後の新たな将来に目を向けているところです。

「商売は十年一区切り」というのを聞いたことがありますが、うちも"ブナケン・チャチャ"の構想を練り始めてから、そろそろんな「一区切り」を迎えたといったところでしょうか。
「頑張っていると、面白いこともある。」
この「一区切り」に、面白いチャンスを与えてくれた、エリちゃん(勝美恵理さん)、編集部の井口さんに感謝!!
そして移住以来、私達夫婦を陰ながら励ましサポートして下さる、元日本人会会報編集長 川口博康氏、この地て知り合いになって長いその他の日本人会会員の皆様にもこの場を借りてお礼申し上げます。
今後ともなにとぞよろしくお願いいたします。

ブナケン・チャチャ・ネイチャー・リゾー
玲子・ダウニ
URL:www.bunakenchacha.com/j
Email:infoj@bunakenchacha.c

玲子・ダウニー

うちのスタッフに前からずっと、「ここにもいるよ。」と言われていた、あの、スラウェシ固有種の動物のひとつで、世界最小サイズの猿として世界的にも有名な「タルシウス」。その類稀な極小サイズにより、親指ザルといったニックネームを持つこの猿ですが、昨年ついに、チャチャ・リゾートのダイニングエリア裏を数メートル上がった木々に群れているのをこの目で見てしまいました。

日本名では"スラウェシメガネザル"と呼ばれるこの「タルシウス」、このあたりではスラウェシ本島側、メナドとは反対側にある港町ビトンにある、タンココ国立自然公園にしか住んでいないものだと言われているので、これを発見した時は当然大騒ぎ！
以前からスタッフには「裏にいるよ。」と言われていたんですが、まさかそんな貴重な動物がうちの敷地内コテージ横に棲んでるとは思えず、また冗談話好きなこちらの人にからかわれているんだろう、くらいにしか思っていませんでした。

既に皆様もご存知かもしれませんが、タンココ国立公園を訪れるツアーは、ツーリストや現地駐在員なら誰でも一度はこの「タルシウス」を拝みに行く、いわば北スラウェシを代表する人気ツアー。それだけ「タルシウス」は大変珍しい生き物で、しかも夜行性、普段は人目につきにくい動物なのです。
（タルシウスに関する詳細は、かつて会報編集をやっておられた川井氏が、以前非常に詳しい記事を会報に出されていたことが。ぜひあの記事はリバイバルしたいですねー。）

ところが、ある日「いっぱいいるよ！」と言われ、ようやく重い腰をあげて見に行ったら、「あっ…！ホント、いたいた！」
夜それほど視力の強くない私さえ、少なくとも3匹は目撃しました。他の人は４匹見たそうです。
顔の半分くらいある大きな目。長いシッポ。それを使ってピョンピョンと飛ぶように枝から枝へ移動する毛むくじゃらで小さな動物。映画グレムリンに出てくるビグモ？にそっくりのこの動物は間違いなく、あのタンココ国立公園で見た「タルシウス」でした。

しかも親指サイズと言われる小さな体格ながら、ものすごく大きな甲高い声で鳴くんですよ、これが。
棲み家である木から夕方５時半頃出てきて、夜通しエサを探しに行く前と、早朝５時ぐらいに棲み家に戻って来て、就寝する前の2回にわたって鳴く習慣のようで、時間もゴム時間が適用されるインドネシアの割に？なかなか正確。

実はこの鋭い鳴き声は、移住以来、コテージ近辺で頻繁に聞いており、私と主人はほぼ６年間ものあいだ、夜行性の"バニキ（こうもり）"の声だと勝手に勘違いしていたので、実際に姿を見たのは昨年が初めてでした。
それ以来、このタルシウスたちはほぼ毎日だったり、数日おきだったりする時もありますが、夕方になると、リゾートの裏でその甲高い鳥のような声を響かせており、彼らがチャチャの敷地内で確実に、私達と共に暮らしていることを気づかせてくれます。
スラウェシ固有種で、国定記念動物ともいえるこの「タルシウス」。
この「タルシウス」以外にも、有袋類のコアラと同類にあたる動物、「クスクス」も棲んでおり、雨が降った後の夜など、たまに敷地内の木の上で、これまた別の類の騒がしい声で鳴いております。これはなんと交尾中の声なのだとか。

驚济するほどの自然が今でも豊かに息づく島、ブナケン島。
今後も海だけではないこの島の魅力を発見していくのが楽しみな毎日です。

ブナケン・チャチャ・ネイチャー・リゾート
玲子・ダウニー
URL:www.bunakenchacha.com/jp/
Email:infoj@bunakenchacha.com

最近、改めて思ったこと・・・

勝見 恵理

みなさん、こんにちは・・・サンティカホテル内にあるタラサダイブセンターに勤務して早いもので４年半・・・メナドでの生活の中で「どうしてこんな事が許されるの??」とか「もっとこうすれば能率がよくなるのに」とかいうのはいつも思っていることですが。最近もこのようなことがありました。

私は約１年ぐらい前から、サンティカホテル内にあるアパート(１軒や)にオランダ人夫婦と住んでいます。前はホテル暮らしだったのでやっと自分の部屋らしきものができました。その自分の部屋をちょっと気分転換も兼ねて模様替えしようと思い、カーテン&ベットシーツ&枕カバーなど新しくしようと思って布地を買いに行きました。メナドの昔のマタハリの隣にある生地屋さんです。1F にはドレスにするようなゴージャスな生地がたくさんありました。これでメナドの女性は教会やパーティーに着ていくドレスを作ります。一通り見てみましたが、あんまり気に入ったものはありません。一つだけ「これならワンピースぐらい作ってもいいかな?」という生地がありましたが。アジアンチックな生地があり「これならテーブルクロスやカーテン、クッションカバーなんか作ったらかわいいかも」っていうのもありました。2F は男性用のスーツの生地とベッドシーツやカーテンの布地があります。

私の目的はベッドシーツ&カーテン用の布地・・・2F に上がってそこのコーナーに行きました。一通り見たけどどれもイマイチ。色も柄も私の好み(たぶん日本人好み)ではありません。一緒に住んでいるオランダ人夫婦も「メナドで気に入った布地を買うのはむつかしい」と言っているので私だけではないようです。種類も少なく、「これダメ、これもダメ・・あっ、これもパス・・」と知らず知らずのうちに消去法で選んでいることに気づきました。結局残った二つの布地をカーテン用とシーツ用として買いました。

思い返してみると、バイクを買ったときもそうです。いろいろなディーラーからパンフレットをもらってきて、どれを買おうかと検討していました。シンプルな色&デザインのバイクが欲しかったのですが、どのメーカーのパンフレットをみてもそういうデザインのバイクはありません。結局その中でもまぁまぁ気に入ったバイクを決めてそのメーカーのディーラーに行きました。そしたら「このタイプのバイクはいつメナドに入ってくるか分からない」といわれました。私が「それなら、ジャカルタにそれを注文して下さい」と言ったら「それはできません」との返事。私の頭のなかは「?????」でいっぱいになりました。「どうして??」注文してそれをジャカルタのディーラーがメナドに送るだけの簡単な作業ではないのかなぁ・・・。結局、メナドに送られてきたバイクをディーラーで見て決めるしかないようで、これも今考えれば「消去法で選んでいたなぁ」って思います。

本当、メナドは選択肢が少ないですよねぇ、みなさんはどう思いますか?

海と太陽と
海の中では何も考え
すむと語るダイビン
ンストラクターの勝見

マナド［インドネシア］

ダイバーが愛す
南海のリゾー

美しい海とサンゴ礁が心を優しく解き放

自宅のバルコニーから「富士山」が見えると、大場玲子ダウニーは言う。ただし、彼女が住んでいるのは日本から4000キロのかなたに浮かぶブナケン島。「富士山」とは、クラバトフと呼ばれるインドネシアの火山だ。

細かいことは言いっこなし」と

は、富士山そっくりに見えるときもあるのだ。

楽園のようなブナケン島にいると、そんな違いは些細なことに思えてくる。ブナケン島は、スラウエシ島北端に位置するマナド（メナド）の沖合に浮かぶ小島だ。

もっとも、島で暮らしているからといって「完全に現実から離れられるわけではない」と、大場ダウニーは言う。

確かに。この世界有数のダイビングスポットで、全9室のダイビングリゾートを経営していれば、現実的な問題も起きるだろう。

海中はストレスと無縁

39歳の大場ダウニーは、イタリア人とアイルランド人のハーフである夫ラファエルとともに、ブナケン・チャチャ・ネイチャー・リゾートを経営している。2人は96年、ダイビングをするために訪れていたマナドで出会い、1年足らずで結婚。99年に島に移り住んだ。

オープン当初は問題続出だった。

MANADO

人口　**42万人**
（日本人17人）

気候　常夏。11～3月は雨期だが、ダイビングは可能

最新トピック　「生きた化石」といわれる古代魚シーラカンスの新種がマナド沖で発見されて世界を騒がせたのは9年前。今年5月には日本の調査団が水深170メートルでシーラカンスの撮影に成功して話題に

NORMAN NG—ONASIA.COM FOR NEWSWEEK

6

[illegible]の[illegible] 大場ダウニーは夫とブナケン島でダイビングリゾートを経営

PHOTOGRAPHS BY NORMAN NG ONASIA.COM FOR NEWSWEEK JAPAN

電気や水道を引くのも大変だったし、SARS（重症急性呼吸器症候群）やテロによる観光不況もあった。資金が残り5㌦になったこともある。だが7年たった今、リゾート運営は軌道に乗っている。

「日本の友人たちからはよく、『あなたはすごい』って言われる」と大場ダウニー。「『どうかしてる』って言う人もいるけど」

マナドの昔の住民は、周りの海がダイビングのメッカになるとは想像もしなかっただろう。17世紀のマナドは、「香料諸島」に行き来するヨーロッパの貿易船にとって重要な港だった。

今では、国際空港を有し、インドネシア屈指の生活水準を誇る都市になった。

世界屈指のダイビングポイントを数多くかかえ、30年ほど前から観光業が発達した。海岸沿いにはダイビングリゾートが点在する。

浜辺の村トンカイナでは、勝見恵理が毎朝のようにウエットスーツを身につけ、ヨーロッパやアジアのダイバーたちを海の中へ案内する。茨城県出身の勝見は、以前はバリでダイビングインストラクターをしていたが、4年前からマナドの近くに住んでいる。

仕事はちょっと変わっているが、人生観はシンプルだ。「海の中では何も考えずにすむ」と、勝見は言う。「ストレスなんてない」

マナド好きのダイバーなら、彼女の気持ちがよくわかるだろう。ダイバーたちの間では、マナドのサンゴ礁と、海中の豪快な絶壁は有名だ。

36歳の勝見は00年にバリから東京に帰ったが、2年足らずでインドネシアに戻ってきた。「帰国して東京で就職したほうがいいと思った。将来が不安だったから」と、勝見は言う。「でも、海や太陽、インドネシアの人たちが恋しくなってしまった」

地元の環境保護にも協力

勝見がいま気がかりなのは、マナドのダイビング産業の未来だ。インドネシア各地で、地元の漁師が使うダイナマイトやシアン化合物がサンゴ礁を脅かしている。

日本やヨーロッパからの直行便ができるという話もあるが、そうなるとダイバーの数が増えすぎるおそれがある。

「大事なのはバランス」と、勝見は語る。「観光客は歓迎だけど、増えすぎるとサンゴ礁が傷むかもしれない」

勝見らインストラクターは、観光業界や環境保護団体とともに、サンゴ礁などの観光資源を守りつつ、観光客を増やす方法を模索している。ブナケン島の大場ダウニーと彼女の夫も、地元住民による海へのゴミ投棄など環境問題の解決に取り組む。

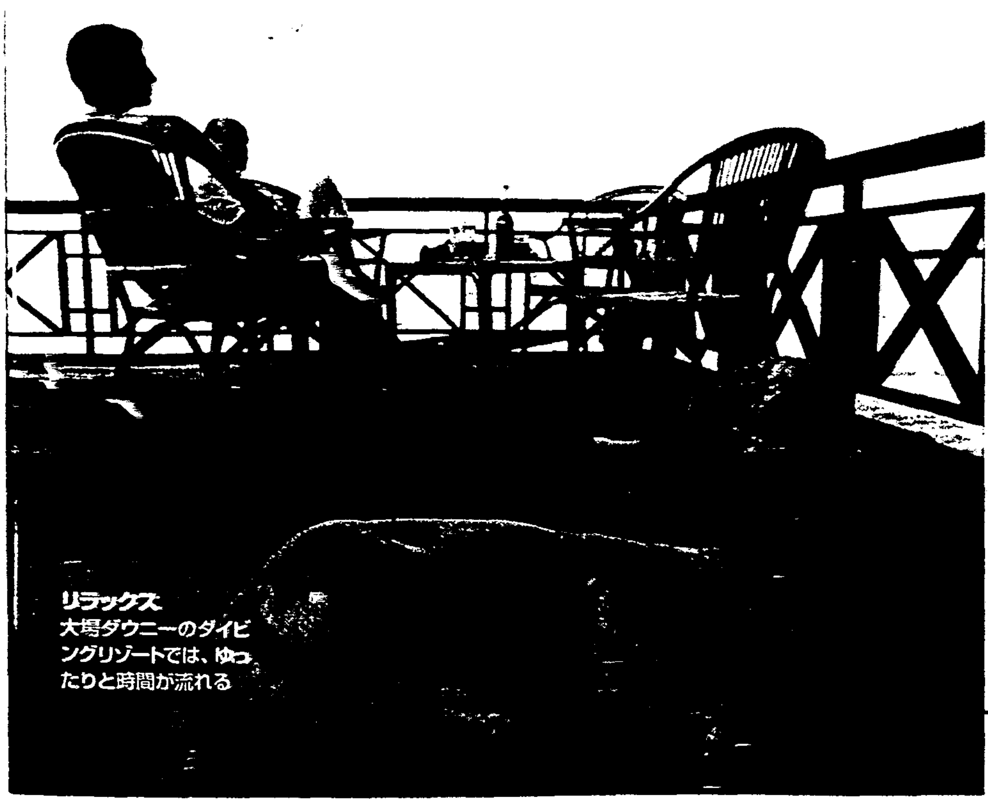
観光客のマナーにも問題がある。「いまだに、ダイビングやシュノーケリング中にサンゴを踏まないというルールを知らない人が多い」と、大場ダウニーは言う。

インドネシア暮らしの長い勝見と大場ダウニーは、言葉にも困らないし、現地の食べ物にも慣れ、マナドの店にも詳しい。それに、日本の友人や家族に、帰国しない理由を説明するのもうまくなった。

「日本人はあまり賭けをしない」と、大場ダウニーは言う。「私にとって、このリゾートは人生最大の賭け」

今のところ、この賭けは成功しているようだ。

ジョー・コクラン


リラックス 大場ダウニーのダイビングリゾートでは、ゆったりと時間が流れる

7

インドネシアシーラカンス

羽根井　義博

「シーラカンス発見　幻の古代魚　スラウェシ沖で撮影　日イ合同研究チーム　生態解明に貴重な一歩」との見出しが、２００６年5月３１日（水）ジャカルタ新聞のトップを飾りました。

なんと日イ合同研究チームは、２００５年４月の現地調査開始後、たった２年目で生きたシーラカンスの映像を撮影することに成功しました。以下は、記事の抜粋です。

スラウェシ島の海に太古の時代から生きてきた伝説の魚、シーラカンスを追って一年前から捜索活動を続けてきた福島県いわき市小名浜の海洋科学館「アクアマリンふくしま」（安部義孝館長）の日イ合同の調査チームは、三十日午前八時半、中部スラウェシ州ブオール沖五百メートルのさんご礁付近でシーラカンスを発見、クルーザーに搭載した自走式水中カメラで、撮影に成功した。「幻の古代魚」の生きた姿を撮影したのは日本の研究チームとしてはこれが初めて。生物の起源を探る上で学術的に貴重な記録となる今回の撮影は、世界的に高く評価される快挙である。

昨年四月の調査では、二週間の調査期間で水中カメラで八十三地点を計千二百三十八回にわたって撮影。ダイバー六人による潜水調査では、水深約百五十メートルの海中五地点で計百六十分間の調査を行った。しかし、発見には至らなかった。

今回の調査は方針を変え、水中カメラだけで広域調査を試みた。四月二十二日、現地入りしたチームは、マナド沖での百七回の水中撮影調査に続き、スラウェシ島北部のブオール沖を中心に調査を実施した。

「アクアマリンふくしま」は二〇〇〇年七月に開館。開館直後からシーラカンスの研究に着手した。インドネシア科学院（ＬＩＰＩ）海洋学研究所のモハメド・カシム研究員、ジョコ・ハディ・クナルソ研究員と、マナドのサムラトゥランギ大水産学部と協力し、日イ両国の研究者とスタッフが情熱を結集し、準備や調査に六年の歳月をかけた末の快挙だった。

安部館長は国際電話で「永年の夢がやっと実った。生態解明の貴重な一歩となるだろう。大災害が続くインドネシアにとっても、良いニュースとなれば」と喜びを語った。調査チームは発見地点のブオール沖を重点的に調査し、撮影と生態観察を行っていく。

以上の様に幾分興奮気味な内容に、読み手も感動してしまいました。

これはもう、この目でシーラカンスの映像を確認せねばならないと思い、実際に「アクアマリンふくしま」に行って来ました。そこで、もう少し詳しくその模様をお伝えします。

調査は、２００６年５月６日～１９日及び、５月２７日～６月５日に自走式水中カメラ（ROV）によって行われました。

ROVは４００ｍのケーブルで繋がれており、１回の潜航で約１時間、シーラカンスの生息していそうな横穴を調査しました。

帰国予定日までに、１００箇所以上の横穴を調査しても、発見できませんでした。

しかし調査を延長し、とうとう５月３０日に、マナドから西へ３５０Kmほど離れた、ブオル沖５００mの水深１７０m地点で、最初の１固体の撮影に成功したのです。それを皮切りに、５月３１日に同じ横穴で２固体を発見しましたが、残念なことに撮影は１固体、さらに違う場所の水深１８０mで１固体、６月４日には同じ海域の水深１５０mで３固体の撮影に成功しました。

６月４日の撮影成功の後、ROVのスクリューが異常をきたし、調査終了を余儀なくされました。まだ調査予定は３日残されており、「もっとみつけられたはず。」と、悔しさを残して調査は終了しました。

今回の調査結果は、７固体発見し６固体の撮影に成功、という事になりました。（そのうち２固体は、同一固体である可能性が高いそうです）。

映像は、深い横穴の奥で緑色に光る目が映し出され、ROVが近づくに従って、ゆったりと泳ぐ体長１mほどのシーラカンス全体が、はっきりと現れてくるものでした。

世界で２例目日本初の貴重な映像と、悠然とたたずんでいるその姿に、しばし釘付けでした。お見せできないのがとても残念です。

タルシウス１０号で、この海域に生息するシーラカンスの名前を、スラウェシシーラカンスと紹介しました。

それは、アメリカのマーク・アードマン博士が１９９８年に標本として確保したシーラカンスが、コモロ島のアフリカシーラカンスとは、ＤＮＡ解析によって別種であるという結論を得、スラウェシシーラカンスと命名された。とお伝えしました。

今回調べた資料によると、その学名は *Latimeria menadoensis* となっていま

した。つまり、マナドシーラカンスと言ったほうが正しいはずです。しかし、やはり一般的では無いようで、インドネシアシーラカンスと、大きな括りで表現されたものと思います。

アフリカシーラカンスの場合も、最初に捕獲された場所が、南アフリカのイーストロンドンのチャルムナ川沖だったので、学名は *Latimeria chalumnae* となりましたが、そのように呼ばれています。

「アクアマリンふくしま」の解説によると、シーラカンスは Coelacanth と書きます。それは、中空を意味する coel と脊柱を意味する acanth という２つの語からなっている。つまり、シーラカンスは、コイやスズキの様な背骨を持っておらず、脊柱は体液の詰まった中空の管からなっている、という事だそうです。

運動能力は、背骨を持っている魚類に比べて大幅に劣っていたと考えられます。

シーラカンスの化石は、世界中の浅い海や湖に堆積した地層から発見されています。つまり、絶滅したと考えられていた白亜紀までは、そういう所で生活していたという事です。

今日シーラカンスが深海に生息している理由は、運動能力の優れた背骨を持つ魚類との競争によって、深海へと生活の場を移していった、あるいは、もともと各地の浅海から深海まで生息していて、浅海性のものが競争に敗れ、深海性のものだけが生き残った、と考えられています。

とすると、今でも世界各国の深海に、知られざるシーラカンスが生息していることはじゅうぶん考えられます。

「アクアマリンふくしま」によると、プロジェクトは、来年で一応の区切り

を向かえる様ですが、今後も調査を続ける方向だそうです。

また、「アクアマリンふくしま」、インドネシア科学技術院（ＬＩＰＩ）及び、サムラトランギ大学は、協力してインド－西部太平洋海域におけるインドネシアシーラカンスの保全に取り組むことになりました。また、「アクアマリンふくしま」は、アフリカシーラカンスの保全プログラムとも連携しているそうです。

保全活動あるいは保全に対する啓蒙活動は、調査研究活動と同様、大切な作業だと思います。本当に期待しています。

今後調査が進み、生態や分布が明らかになるその時まで、どこか深い海の横穴で、彼らは不思議な古代魚で在り続けるのでしょう。シーラカンスは、インドネシア語で RAJA LAUT と言うそうです。その名の通り威風堂々として。

インドネシアに接して４０余年

－建設業の目から－

石野　赫

いつもながら、インドネシアの体験談・感想を綴らせてもらいます。

自分が、この国へ初めて入ったのは、東京オリンピック直後の１９６４年、１１月でした。以来、インドネシアに接すること４０余年、昨年７月、ビトン港建設工事完成検査業務をもって最後のお勤めを終わりました。

これまでに、１９６５年の９・３０事件に遭遇したことや、ビトン新港の紹介、北スラウェシ日本人墓地整備など本誌に寄稿させてもらいましたが、今回は建設業を通じて、この４０年間に体験したインドネシアの重土木工事技術面における発展について、小生なりの感想を簡単に綴ってみたいと思います。

初めての任務地は、東部ジャワのダム工事現場でした。当時は、まだスカルノ大統領時代でした。独立後ほぼ２０年経っていたのですが、失政から経済は疲弊し、国民の生活は見るも無残でした。土木現場に来る労働者は一日二食がせいいっぱい、それも粗末な食事でした。殆どが裸足、中にはすり切れてすだれのようになったランニング姿の人もいました。建設会社はまだ育っておらず、従って労働集約的産業である建設に必要な各種技能職の募集もままならないものがありました。そこで、重機から工具の持込みは勿論のこと、あらゆる職種の達人に日本から参加願い、現地人を訓練してもらいながら作業を進める体制で対処しました。現地産建設資材も量的に品質的に重土木工事に適するものはまだなく、鉄筋・セメントから釘に至るまであらゆるものを日本から搬入して使用しました。

この現場に4年近く駐在して、他国に転勤になったのですが、１９７９年暮、再度インドネシア勤務を命ぜられ、北スマトラのアサハン・アルミニウム精錬工場工事作業所に着任しました。１０数年間留守にしているうちに、この国は素晴らしい発展を遂げ、その産業の起動力といわれる建設関連産業と人材が豊富に育っていたのには驚きました。前回のダム工事で、日本人技師の指導を受け計画・設計を担当していたこちらの人たちは政府の支援で、コンサルタント会社を設立して立派に活躍していましたし、工事担当部門はこれまた建設会社を設立、手広く請負工事を手がけていました。

新しく赴任した場所でも、我々を支援してくれる現地スタッフや、優秀な各種下請業者も逐次見つかり、工事をスムーズにスタートすることができました。応募してきた労務者の裸足はサンダルや靴に代わっていました。また、身なりも小ざっぱりしていました。生活のレベルが向上し、前回との差の大きさに驚きを禁じ得ませんでした。為政者の政策の違いで、国はかくも急速に変わるものかと、不思議に思ったくらいです。スカルノに代わって政権の座に着いたスハルト大統領は後に「開発の父＝Bapak Pembagunan」と、国民から呼ばれるようになりましたが、わかる気が致します。

１９８４年、アサハンの仕事を終えて、ジャカルタへ転勤、合弁会社の役員となって首都に駐在しました。ここで、インドネシア国内に散らばる合弁管轄下の工事現場を中央から見守ったのですが、既に育てあげられたインドネシア人スタッフのみでそれぞれの工事現場が自主的に管理され、運営されていました。まだ、経験が今一歩なるが故の失敗と成功のバラツキの大きさや試行錯誤を繰り返してはいましたが、着実に進歩があり、会社の発展に寄与してくれていました。若い国のエネルギーと将来性を十二分に感じました。

いつの間にか、大型土木工事の入札などの際にも、我々の競争相手は海外からの進出建設会社ではなく、現地業者になっていたのです。現地政府の意図する外国企業からの技術移転が進み、ローカルが着々と実力を着け、成果を挙げつつある証拠でした。

１９９５年、自分は３５年勤めた建設会社から身を転じ、土木技術コンサルタント会社に席を置きました。そこで、スマラン港のコンテナー埠頭建設工事の施工監理業務に参画したのですが、ここでは、現地業者４社による企業連合（Joint Venture）が、厳しい国際入札を生き残り、工事契約を獲得していました。土木工事は「水」との接点が多ければ多いほど難しいと言われているのですが、その上に地盤条件が極度に悪いスマランで見事、埠頭工事を完成させたのですから、見上げたものです。（こちらは、工事期間中はらはらのしどうしだったのは事実なのですが、、、、）

自分は、これに続いて、２００１年から西テイモールのクパン港並びに北スラウェシのビトン港の同種開発工事に同じく施工監理役として参画しました。ビトン新港建設は、ご存知の通り日本の「りんかい建設」が施工を担当しましたが、クパン港は、「りんかい建設」とのＪＶパートナーであるインドネシア業者が単独で港を完成させました。

自分がインドネシアを見る時、いつも尺度の原点になるのは１９６４年１１月の初渡航・初体験です。あの貧困のどん底で喘いでいた国と国民、それに総てを外人技師から指導されていた現地技術者を思い起こし、それとの比較で判断してしまいます。

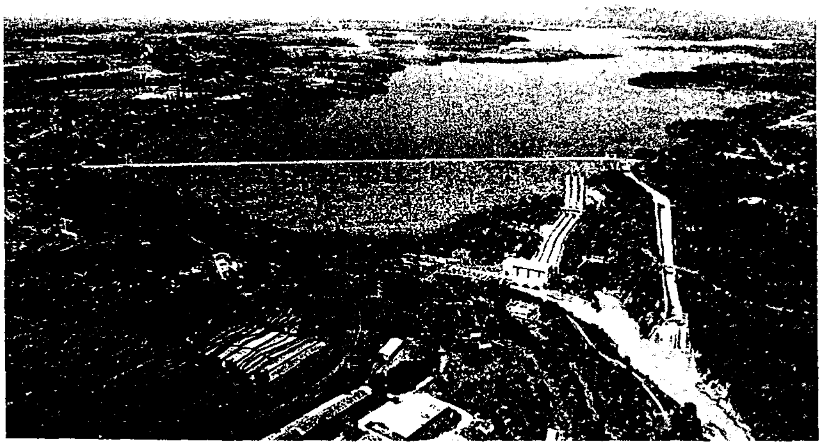
ただ非常に残念なのは、技術的に見ればかように輝かしく飛躍的な発展をなしているのですが、その裏に、開発重点政策による富の偏在という「振れ」現象を発生させ、また、それが私腹を肥やす機会を虎視眈々狙うと言う社会ムードを派生させ、折角の発展を社会的に歪めていることです。

貧富の差を狭め、悪しきムードを排除する国民運動でも起これば、この国はもっと良くなるのでしょう。現に、１９９８年のスハルト大統領失脚劇は、行過ぎた開発独裁によるこのアンバランスへの国民の不満と反発からと思われますし、国民は目覚めたかに見えました。

しかし、スハルト退陣から８年が経ち、今はスハルト後４人目、ユドヨノ大統領が国の健全化に向け頑張っておられるようですが、２１世紀の特徴の一つであるテロ含みの宗教問題がこれに絡みだし、問題が更に複雑になり苦労されているようです。

インドネシアに接して４０数年。この国は自分にとっては第二の故郷となっています。いろいろな艱難を乗り越え、バランスの良い国に発展して貰いたく、心から願っている次第です。

完



◀流域最大の貯水容量2億5000万㎥と発電設備容量10万5000kWを誇るカランカテス・ダム。ダム高100ｍのフィルダムで、この建設から技術移転の歴史が始まったといえる（1979年撮影）

老後に備え・・・？

PT. Arta Samudra
今泉　宏

北スラウェシへ移動となり 3 年目に入った。北スラウェシ日本人会の皆さんとも知り合いになることができ、このタルシウスにも初めて投稿させて頂くことになった。ビトンへ来る前はバリ島西部に住んでいたのだが、在住している日本人がとても少なく、よく顔を合わせる 3 人だけで西バリ日本人会を作り、ちょくちょく会合を開いたものである。北スラウェシには立派な日本人会があり会報まであるのに、会合の回数が少ないのが自分としては少々不満である。昨年結婚して以来、妻や子に気を使い、外で酒を飲む機会がめっきり減ってしまった。日本人会の会合があれば妻にも文句を言われず外出ができるのになぁ・・・。

ところで今回の記事だが、長崎さんからは真珠に関するレポートを出してもらいたいと打診があった。しかし、何十年も真珠養殖に携わっている大先輩がいる中、真珠養殖暦 12 年の自分が真珠を語るのはいささか僭越に感じたので、別の差し障りのない話題にさせていただく。あと 20 年ぐらい経ったら真珠の話題をえらそうに語ることができるようになるだろうか・・・。

現在、私はリクパンへ行く道の途中にあるタテルという村に家を建てている。
タテルという村はクラバット山の麓にあり標高も高い位置にあるので夜になるとジャケットを羽織らないと寒いぐらいの気候である。この地域の産業は主にヤシの生産が多いのではないかと思う。近くで金鉱脈が発見されそれで潤っている人たちもいるらしい。北スラウェシ人はイカン・マスやイカン・ムジャイルを好んで食べることでもよく知られているが、この地域でもそれらの淡水魚の養殖池が多く見られる。

ところで、イカン・マスだが私は北スラウェシへ来てすっかりはまってしまった。アイルマディディの隣にシュクルという村がある。この辺りに池付きのレストランが何軒か建ち並んでいるが、ここで食べるイカン・マスはとても美味しい。揚げてよし、焼いてよしである。鯉は日本でも古くから薬用魚として知られてきた。母乳の出をよくしたり、貧血を防ぐ働きなどがあるらしく、妊娠中や授乳中の女性が食するとよいらしい。また、コラーゲンも多く含まれているので、美肌効果も期待できる。この魚は小骨が多いのが難点だが、からりと揚げてしまえばそれほど気にならなくなる。焼いた場合は小骨が気になるもののとろりとジューシーな感じがよい。特に皮の部分は外側がカリッとして、内側はトロッとしてとてもうまい。多分あの内側のトロッとした部分にコラーゲンが多く含まれてい

るのだろう。

話を戻して、何故そんなところに家を建てているかというと、別にヤシを栽培するためでも、金を掘るためでも、鯉の養殖をするためでもない。もちろんチャプティクスを作るためでもない。実は義父がタテル出身でそこに池つきの土地を持っていて、老後をタテルで過ごしたいのだが家を建ててもらえないだろうかと頼まれたからだ。自分の家も借家なのに人の家など建てる余裕はないよと思ったが、その土地を将来妻が相続するという話になったので、それなら半分遊びで作ってみるかという軽い気持ちで家の建設に踏み切ったのだ。

皆さんもご存知と思うが、トモホンに木製の簡単にばらして移動のできる家を売っている場所がある。外見はなかなかいい感じにできているし、材木もカユベシなどしっかりしたものを使っている。田舎の自然に囲まれた場所にはよく似合うと思う。値段も手ごろで1ペタック（3m×3m×1部屋＋リビング3m×3m＋ベランダ2mぐらい）がだいたい20ジュタから25ジュタぐらいである。私は2ペタック（3.5m×3.5m×2部屋＋リビング3.5m×8.5m＋ベランダ2.5m）の建物を42.5ジュタで購入した。それを高床にして1階部分にさらに2部屋とキッチン、トイレを追加することにした。これでだいたい合計100万円ぐらいでおさまるのではないかと思う。

2階の木製部分はばらして組み立てるだけだから2週間ぐらいで完成してしまった。1階部分はレンガを積んだりタイルを張ったりいろいろあるから1～2ヶ月ぐらいかかるだろう。10月中には完成すると思う。

老後は田舎へ移り、妻と2人で気ままな生活を送り、たまに子供や孫たちが遊びに来るのを楽しみに待つという義父母のライフスタイルはうらやましいと思う。

自分も老後はタテルに住むのもいいかもしれないなと思う。住居はとりあえず確保できたのでインドネシアの物価がべらぼうに高騰しなければ年金でそこそこの生活ができるのではないだろうか。

義父母の老後の生活のスタートを手伝っているうちに、つい自分の老後のことまで考えてしまったが、まだ30年も先のはなしか・・・。

２００６／９／２７
川口　博康

<u>戦争と鰹節</u>

今年２月に３年半振りに懐かしいミナハサを訪れることができました。昔お世話になった皆さんともお会いできたこと，嬉しかったですね。お陰さまで兄弟会をこの地で楽しくやることが出来ました。
ブナケンのれい子さん、日本人墓地を案内してくれた長崎さん、水産業の今を話してくれた平野さんや吉田さん、私のこの地での大先輩で心のよりどころとしていた外岡さん、真珠養殖と新しくすっぽんの養殖にチャレンジするという落合さんなどにお会いすることができました。みなさん夫々に自分の夢に挑戦されている様子に感動させられました。

　この地を離れる時は、６０歳定年退職でした。リタイアしたら空気のすばらしいミナハサのトモホンで年金の範囲でショートスティしながら人生の後半を過ごすが出来ることを確信し、一緒に汗を流した皆さんとの再会を夢見て帰国したものです。
夢を実現することはこの６年間を振り返ってみればなかなか難しかったと言わざるを得ません。この間にたった二回しか訪問できませんでした。トモホンで夢みるのは少しばかり先に送らざるを得ない状態になっています。

今回、この「タルシウス」の編集でがんばっておられる長崎さんから遠いビトンの地から「何か原稿をかきなさいよ」とお電話を頂いてしまいましたので急遽その熱意に答えるべきパソコンに向かっているところです。

　さて、これからが本題です。
私は１９９７年役職定年後縁あってこのビトンで鰹節作りに関わってきましたので、テーマを「戦争と鰹節」としました。
インドネシアは日本へ鰹節の輸出を１９９５年以来ＮＯ．１の座を保ってきています。
しかし、今年に入りその座をフィリッピンに奪われてしまっています。
この地で鰹節作りに関係してきた者としては「カンバレ、ビトン」と応援したいですね。
２００５年インドネシアから日本に輸出した鰹節は２，０４９トン、ソーダ節８３７トンその他、メジ節、イワシ節などがある。今日本は鰹節類を世界から７，７００トン輸入している。その内３７％がインドネシア（９５％がスラウェシ州ビトン）からです。

最初このビトンで鰹節を作り始めた時、従業員の皆さんから「こんな固く真っ黒なものを本当に日本人は食べるのか」と笑われた物です。カビ付けの鰹節の食文化は世界でも日本しかありませんね。もちろんこのビトンでもありませんでした。ナマリ節までで「イカン

フーフー」として売っています。

鰹の骨が縄文時代の古墳や貝塚から発掘されていることから４０００年～６０００年前既に日本人は鰹を食べていたことになります。この太古の時代から堅魚は干魚として食されていたようです。日本食の調味料の基本を作ってきた現在のカビ付けされた鰹節は江戸時代の後期に完成したと言われています。
保存が効くうえにタンパクの補給に適していた事から軍食として重宝がられていたことが昔の本から推測されます。近年は鰹節からツナ缶詰に変わっていますね。

「古事記」に雄略天皇（４７０年頃）が「日下の直越の道より河内に幸行しき一一」途中、前方にみえる堅魚を上げて作った屋敷を焼き払われようとした話のなかで、この堅魚が何であったか（鰹節か、かつおぎー堅魚木）もし、鰹節を沢山干して兵糧を目的にしていたとすればこの時代すでに沢山の鰹節が軍食として使われていた事になります。

奈良一平安朝時代（７０９－１１９１年）は貴族階級と庶民の生活差が大きかった事からかつお節は庶民には殆ど食べられなかったようです。このようかことからこの時代にどこまで軍食として使われていたのか疑問です。
この時代、祭礼や宮中の催事があると、強飯をにぎった屯食（とじき）を下級の武士にくばったことが次第に兵糧としての「にぎりめし」となっていきました。

源平合戦では玄米を焼いた「にぎりめし」を竹の皮や木の葉で包んで戦陣食としています。これに「かつお節」梅干、味噌などを持参しています。
「北条五代記」によれば、「天文六年（１５３７年）夏、北条氏綱が小田原沖でカツオ釣りをみていたところ、偶然カツオが船に飛び込んできた。これを見た家臣たちは、戦いに勝つ魚が飛び込んできたのは吉兆であるとして武州との戦に勇んで出陣したところ大勝して以来、出陣の際に戦士への引出物に鰹節が使われるようになった事はあまりに有名な話となっています。

「三河之物語」——（　鰹節を上皮けづりて、中を苞にはさめば　物前にてもまたひたる時も　かみそうろえば　事之外　力になる由）と鰹節の携帯の効果が記されています。
この他当時の兵法書に鰹節がいかに腰兵糧として良いかが記されています。
この頃、すでに鰹節が疲労回復に効果があることが分かっていたのでしょう。長い間鰹節は高級調味料として使われてきていますが近年は健康に良いとされ機能食としても見直されてきています。また,鰹節を携行薬品のようにも紹介しています。
近代になっても鰹節は軍需品として重要な位置をしめています。軍の買い付けにより、

日清戦争が始まる前年、明治２６年（１８９３年）には¥１．１４／貫であったものが
終戦の年明治２８年（１８９５年）には¥２．２５／貫と２倍になっています。
日露戦争の開戦年（１９０４年）にも同じように相場が暴騰しています。
「にんべん」は軍から鰹節の買い付けを一手に引受て大きく力を伸ばしています。

第二次大戦でも鰹節が戦陣食として使われています。
大正から昭和にかけて「南進」という政策もありいくつかの漁業基地が南方に作られました。開戦となり軍需物資の補給がとぼしくなると国策会社に組み込まれ海外の鰹節製造基地は軍需品として納入するようになっていきます。

そのような中で鰹節を作っていた主な海外基地は

① ボルネオ（現マレーシア、サバ州　シアミル島　バンギー島）
② 南洋諸島（パラオ　等）
③ インドネシア（ビトン、テルナテ）　がありました。
④ フィリッピン（ルソン島　パラウイ島＝焼津島）

①. ボルネオ水産公司が１９２６（大正１５年）に設立されて缶詰、鰹節など一大漁業基地となっていました。戦前海外に進出した漁業基地としては最大のものではなかったでしょうか。

②. 戦前のパラオで製造された鰹節は「南洋節」として、マーケットの２５～３０％のシェアがありました。

③. インドネシアービトンで鰹節製造に従事していた大岩漁業も軍との関係が深くなって行き国策会社である「南洋貿易」のもとにあった「東印度水産会社」に組み込まれ漁獲した魚や鰹節を軍に納めています。終戦までの僅かの間が、この基地の最も栄えた時でしたが、爆撃で全ても無くし撤退しています。当時ビトンを漁業基地として開発されたのは、トミー大岩さんのお父さんである大岩勇氏です。当時は「かつお王」とまで言われて尊敬された方です。

④. 焼津では開戦と同時に漁船を軍が徴用したため　原料となるかつおが水揚げされなくなり、工場を閉鎖せざるをえない状況に追い込まれています。当時鰹節作りで最大基地であった焼津の人たちは原料が無くなったことから「皇道産業焼津践団」を結成し、新天地を求めてフィリッピンとボルネオーに６００人以上の人達が渡っています。
ここでも戦争で沢山の犠牲者を出し撤退しています。

終戦後、いずれの基地でも鰹節作りに何人かの人達が挑戦されましたが現在まで継続し残っているのはビトンだけです。そんなに古くないビトンの歴史を振り返る時，日本人による漁業基地進出がこの町の礎となっていることは間違いの無い事実です。

h ·I 66·61 02·6 ·0007

この町の区画整理の線引きは日本人（鹿児島の方）であったと聞いたことがあります。
歴史が取り持つ縁として、関係したいずれかの市町村で友好都市として縁結びが実現しないかと期待している一人なのです。

携帯食として使われた鰹節

平和時に沢山の場面で携帯食として鰹節が使われています。

南極大陸探検
未開発地への探検
遺跡の発掘調査
オリンピック参加
ヒマラヤ登山
マナスル登山
各登山

日本人は携帯食として又戦時中に鰹節が採用された理由としては、栄養があるからだけではなく、古くから日本人が味わってきた「うま味」があったからでしょうね。

スラウェシに在住の皆さん、この地で作られた鰹節が今日本でも日々の食卓にあがっています。どうぞこの地でも日本食の調味料の原点である鰹節を誇りをもって広めて頂きたいと思います。地元のレストランにも少しずつ取り入れられていると聞いています。
昔から疲労回復に良いと言われている鰹節を味わって頂きお元気にご活躍のほど、お祈りしております。
つたない文にお付き合い頂きありがとうございました。

平成１８年9月２８日
御前崎にて
川口　博康

作文と識字

ミナハサ日本語研修センター　専任講師　上杉祐子

日本語の授業のひとつに「作文」があります。日本の小学生が国語の時間や夏休みの宿題に作文や日記、読書感想文を書くのと同じように、日本語で文を書きます。ひらがな、カタカナから習い始めて1か月ほどの時から書きはじめ、毎週、400 字詰め原稿用紙一枚をまとめる作業を続けているうちに、文法や語彙も日本語の文章らしくなり、なんとか読める作文になってきます。

初級前半（200 時間まで）のテーマは「わたしの家」、「わたしの家族」といった自分について書くことが多いです。初級後半（400 時間まで）になると、「私の夢」、「もし、私が二人いたら」など、同じ自分のことでも考えたことをまとめるようになります。はがきや手紙の書き方も勉強しますが、日本語教材にあるような季節のたよりの感覚は理解しにくいかもしれません。中級（800 時間まで）になると、客観的に描写したり、考察したり、日本の大学や会社で必要なレポートを目標にするのですが、この段階でも漢字習得が 5-600 字程度ですから、ひらがなが中心です。ところが、学生にコンピュータで入力させてみると、ワープロのおかげでかなり整った形式にしあがりますが、作文の基本は原稿用紙に、自分の手で書くことです。さらに、大学進学のための日本留学試験の記述問題ともなれば、20 分で 400 字という時間制限もでてきます。

日本語学習のための作文は、識字教室や夜間中学でも行われています。日本では、小中学校の義務教育で 100%ちかい識字率（文字の読み書き能力）といわれていますが、実際にはかな書きさえもおぼつかない人がいます。中国残留帰国者や自分の国でも日本でも教育を受けられなかった在日韓国朝鮮人一世のおばあさんたち、日系人や日本人の配偶者等の定住者、そして不登校の子供たちなどです。役所や銀行、郵便局で自分の名前や住所を書いたり、地区のお知らせを読んだりすることのできなかった人たちにとって、自分のことや自分で考えたこと、言いたいことを書きつづる作文は、たいへん意味がある学習です。日本社会で自分たちの言葉がコミュニティで聞き届けられ、同等の知性と思われるためには、日本語の読み書きはどうしても必要となるでしょう。

勉強としての作文は書くほうも、読んで添削するほうも、結構たいへんです。しかし、日本語力をつけるためには作文を書き、発表することは欠かせないと思います。また、教える側にとっては、生きた情報源となります。たとえば、ミナハサ日本語研修センターの昨年度の修了生のうち4人に、授業数時間にわたって「ミナハサ地方ガイドブック」の原稿となる作文を書いてもらいました。基本データのほか、歴史、文化、食べ物、各地（トモホン、ミナハサ、北ミナハサ、南ミナハサ）のようすを分担して書き、ガイドブックとしてまとめましたが、日本人観光客向けに公開するためには、今後かなりのリライトが必要です。それでも、楽しい作文ができあがりましたので、一部、紹介したいと思います。

各地のようす（2）ミナハサ　　　　　　　　　　ウインディ・サンゲル

ようこそ、ミナハサへ。

もし皆様がりょこうの好きな人なら、ミナハサにりょこうするのをきめたのは、よかったと思います。

まず、マナドからピネレンへ行きます。そちらにはうつくしいたきがカリ（村のなまえ）にあります。たきはきれいで大きいです。

トモホンの道路をとおりすぎると、レイレムがあります。レイレムは工場がある町です。レイレムの道の両がわをみるとすぐわかります。木がきちんとならべられています。本だなやタンスなどを作っています。乗り物をおりて見てもいいです。休みたいならレイレムとラヘンドンのあたりにおんせんがあります。おんせんなので、すこしいおうのにおいがしますが、けしきがいいです。おんせんにはいくつかのへやがあり、かりられます。リノこもあります。

レイレムからソンデルへ行きます。ここでゆうめいなのはタマンエマンというところです。そこではおよぐことができます。プールはきれいです。なまえのとおりにわ（taman）もあります。また、ティムブカル町があります。そちらにはニマンガ川があります。ラフティングができます。さいごまで2時かんぐらいかかりますが、皆様もどうぞラフティングをしてみてください。

ソンデルからキアワへ行きます。きょうかいのほうに右へまがると、たきの道が見つけられます。村の人に「たきはどこ？」ときいたら、すぐえがおでおしえてくれます。そちらにわかい人がおおぜいいます。下のほうはプールがあってとてもきれいです。かえるときかいだんをのぼっていくと、いくつかのぞう（patung）が見られます。

さんぽをつづけましょう。ピーナッツとビアポン（にくまん・あんまん）の町、カワンコアンです。ピーナッツとビアポンがたくさんうられています。ビアポンを食べてみたかったらGembira「グンビラ」の店に行ってあたたかいビアポンが食べられます。町の入り口には昔のせんそうのときの日本のほらあな（goa）があります。ほらあなのまえにはおいしいレストランがあります。ペレト「こうもり」、RW「いぬ」、べべ「あひる」などのりょうりがたべられます。おいしいし、ねだんもやすいです。（注2006年8月現在閉店）

カノナンにはブキット・カシ「あいのおか」があります。そちらもけしきがとてもきれいです。かいだんをすこしのぼると、5つのしゅうきゅうのおいのりのところがあります。もうすこしのぼると大きなじゅうじかがあります。そちらからトモホンし、カワンコアンし、ランゴアンし、トンダノこがみられま

す。ほんとうにいいけしきです。

そちらからランゴアンへ行きます。ランゴアンでばしゃにのれます。ミナハサのなかでも、ランゴアンはいちばんばしゃがたくさんあるところかもしれません。

そしてブキット・ディンギ「たかいおか」へ行きます。ブキット・ディンギはランゴアンから1時間ぐらいかかりますが、けしきはとてもきれいです。白いすなのかいがんがあります。人もしんせつです。そこでさかなをかって、じぶんでやくことができます。とまるところがありませんので、早く帰ったほうがいいと思います。

そちらからロンボケンへ行きます。そこには一ついいところがあります。スマルエンドというところです。プールがあって水はあたたかいです。けしきはきれいです。そちらからはトンダナこがはっきり見られます。とまるところもあります。サービスはいいです。ロンボケンとトンダノはちかいです。くるまで20分ほどです。トンダノはミナハサ地方のちゅうしんの町です。

トンダノこのまわりにはいくつかのレストランがあります。そちらはイカンマス「こい」とムジャエルが食べられます。ねだんはやすいし、じぶんでさかながえらべます。

まだミナハサには、よいところがたくさんありますので、どうぞ楽しんでください。

インドネシアの珊瑚礁

長崎節夫

何年か前のじゃかるた新聞にインドネシアの珊瑚礁についての連載記事が載っていておもしろく読みました。私が育った島は珊瑚礁からできた島—いわゆる「隆起珊瑚礁」の島で、島の回りもまだ隆起しない珊瑚礁、すなわち「現役の珊瑚礁」だらけです。物心ついたときから珊瑚礁にとりかこまれて、そこで獲れる魚や貝、エビ、かに、たこなどを食べ、まだ泳ぎもできない幼児のころから珊瑚の海で遊んで育った身としては「珊瑚礁」という単語は身体生理に組み込まれた単語となっていて、たとえばこの単語を耳で聞くということは、鼓膜の振動を脳みそで解析して認識するということではなく、身体そのものがダイレクトに聞いて反応しているようなところがあるわけです。

そのような事情で、じゃかるた新聞の記事も非常に興味深く読みましたが一つだけ生理の奥にひっかかるものがありました。　新聞の記事で何が引っかかったかというと、「統計によると国別の珊瑚礁面積ではインドネシアが世界一」という箇所でした。アレ??? 私はそれまでインドネシアに珊瑚礁の少ないことを不思議がっていましたから。私はショウバイがらインドネシア全海域とは言えないまでも普通の日本人駐在員にくらべて、あるいは普通のインドネシア人に比べても、インドネシアの沿岸海域は広範囲にみていると思いますが、インドネシアの海は全般的に珊瑚礁が少ないと認識しています。なぜ少ないのか。自分なりに理論づけようと考えたりしていますが、本式に理論付けるのはわたしには荷が重過ぎます。

「インドネシアは珊瑚礁の少ない国」…私が見てきた海域についてだけでもいちいち論じるのは大変ですから、ここでは私たちの目の前の海—北スラウェシ(ミナハサ半島)の沿海だけ見てみましょう。とりあえずゴロンタロの南岸をスタートしてトミニ湾沿いに東へ。珊瑚礁らしきものはまったく見えません。モリバグを過ぎてフレスコ岬あたりから海岸線は次第に北東向きに方向がかわります。このあたり沖を眺めても珊瑚礁らしきものは見えません。岸沿いにところどころそれらしきものは見えますがとても珊瑚礁だといばれるものではありません。コタブナン、ベランからコラコラと、次第に北上してケマに達しますが、ケマの手前あたりまで幅の狭い裾礁が海岸線沿いに帯状に続いているのが見えます。しかしこれも「珊瑚礁があるな」という程度のもので「オレは珊瑚礁だ」といばれるものではないでしょう。観光資源になれるかどうか。珊瑚礁と海岸の間はだいたい１００～２００メートルくらいか。水深の浅い礁湖になっていて、そこではテングサの養殖が盛んに行われています。このあたりの砂浜の砂が白いのはサンゴ成の砂であるからです。メナードやビトゥン周辺の黒い砂浜とは気分が違います。ところどころに素敵な白砂のビーチがあって休日のピクニックにはもってこいの場所だと思いました。続いてケマの近辺を見てみま

す。ケマの海岸に帝国海軍の陸戦隊が上陸を敢行したのは、ケマの正面の海ーケマ湾ーに珊瑚礁などの障害物がなかったことも理由のひとつです。正確に言えばレンベ島の南西の端にちょっとした珊瑚礁があります。これさえ確認すれば上陸行動は楽勝、ということであったかと思います。ケマの北隣はタンジュンメラー(赤い岬)です。赤い岬には白い砂浜があって、行楽地になっています。浜の砂が白いのはサンゴ性の砂であるからです。ケマの浜は火成岩性の黒い砂です。少し横道にそれますが、ケマやタンジュンメラーは「メナード富士」と呼ばれるクラバット山の裾野にあたります。クラバット山が最も素敵に眺められるのはどこか。私が見た限りではケマの浜の沖合いが一番です。7~8年前にはケマの浜からの眺めもよかったのですが、急に人家がふえて浜の水際ちかくまでゴチャゴチャしてダメになりました。玲子さんのブナケン島からの眺めもよいそうです。

本題にもどって、ビトゥンからリクパン(ミナハサ半島の北端)を西へまわりこんでメナド湾に入ります。このあたりの海岸の砂も火成岩性です。サンゴはあっても珊瑚礁はありません。ただし何事にも例外があって、玲子さんたちが活躍しているブナケン島、この島はメナード湾に蓋をするように置かれているいくつかの島のひとつですが、これは珊瑚礁成の島で周りも珊瑚礁にかこまれています。メナードの海岸から眺めると、沖合いにとんがり帽子のメナードトゥアが突っ立っていてそのすぐ東隣に水面すれすれの平べったいブナケン島が見えます。メナードトゥアは海中から聳え立った古い火山です。なぜ隣り合った場所に火山成の島とサンゴ成の島があるのか。ブナケンは珊瑚礁の成立と発達を説明するのによい場所でもあるようです。興味のある方はブナケン島に泊りがけで行かれて、島の女主人玲子ダウニーさんにお尋ねください。

メナード湾から西へ、アムラン、ラブアンウキとたどってクァンダンに達します。クァンダンはゴロンタロと大体背中合わせになる位置にあたります。この一帯もサンゴはあっても珊瑚礁はありません。

北スラウェシ沿海に珊瑚礁がほとんどないということは、こちらの漁業の形態を見ても読みとれます。まず、漁業の対象となっている魚がカツオ・マグロなど外洋性の魚と、沿岸性の魚でもアジ類・メジカ(マルソーダ)などです。アジ類・メジカ等は捕獲するのにまき網をつかいます。まき網はそれを使用するためには十分な水深と広い海域を必要とします。珊瑚礁の多い海では成立しにくい漁法です。珊瑚礁が少なくて沿海部分まで水深が十分にあるからまき網漁業が普及していると言えるわけです。

周りに珊瑚礁が少ないことは町の市場で売られている魚を見ても推測できます。ビトゥンの市場なら少しは珊瑚礁性の魚をみることができます。それでもあるかないか、今日あっても明日はあてにならないという程度です。売り台の上で大きな顔をしているのはカツオ・マグロ・シイラ・サワラなどの外洋性の魚と、沿海でまき網に巻かれたメジカ・ムロアジ・メアジ・グルクマーなどです。珊瑚礁性の魚とはブダイ類、アイゴ類、ハタ類などです。魚以外にもイセエビの仲間や多くの貝類がありますが、市場にはこれらの海産物が極端に少ないと思います。

このように珊瑚礁の少ない北スラウェシにあって、ブナケンの海はサンゴを売り物にしているのですからそれだけに貴重で、これは何としてでも守り抜かねばなりません。珊瑚礁が死滅するということは、自然的な要因によることもありますが大体は人為的な破壊行為によるものであると考えてよいでしょう。マカッサル空港の着陸前に沖合いに点在する珊瑚礁(であった礁)を飛行機の窓越しにながめることができます。活力のある珊瑚礁なら褐色、緑、青緑、白色などが混ざって人間の技巧では表現が難しいような美しい色彩をしていますが、マカッサル沖のそれは灰白色になって、生きている珊瑚礁ではありません。さんご礁の死骸。あの珊瑚礁を殺したのは多分漁業者でしょう。凶器はダイナマイト、またはシアン化合物(青酸カリ)でしょう。

前述のじゃかるた新聞の記事にもジャカルタ沖にあるプロースリブの海中景観について、サンゴが死滅して以前見た景観とはまったく違うものになっている、と書いていました。これも密漁者による破壊と考えるのが妥当でしょう。

. 魚に限らず、珊瑚礁の海に棲息するような生物たちにとって、珊瑚礁というのは実に理想的な生活環境をそなえています。外敵におそわれた際に身を隠せる大小無数の退避壕あり、小魚たちが安全に遊べるサンゴの林あり、礁原と呼ばれる平野には牧草が生えていてアイゴなどはそれを食べにきます。サザエなどの貝類もあたりが薄暗くなるのを待って礁原に這い出てきます。もちろん珊瑚礁に頼って生きている魚たちでも、強い者は弱者を餌にして厳しい食物連鎖のなかで生きているわけですが、おおむね自然のルールを守って一定のバランスの中で生きているものです。ところがこの中に「人間」が割り込んでくると困ったことになりやすい。人間は往々にして自然界のバランスをくずしてしまうものです。

人間も自然界の生き物の一つである以上、山や海に生活の糧をもとめるのはやむを得ないこと、というよりもそれが本来の姿でしょう。私たちの先祖は太古の昔からそうやって生きてきたし、これからも本質的にはそのスタイルが続くでしょう。しかし「続くでしょう」といっても続くためには人間も自然界の一員として自然界のルールに従わねばなりません。サンゴの洞窟にひそむ魚やエビを駆り立てるのに青酸カリをばらまけばどうなるか。群れ泳ぐ魚をし止めるのにダイナマイトを使用すればどのようなことになるか。珊瑚礁の生き物たちにとっては、青酸カリやダイナマイトの使用は毒ガスや原水爆の使用に匹敵するものです。海藻、サンゴもふくめて「全滅」ということになります。無差別大量破壊。国際法違反です。

マカッサルやプロースリブの珊瑚礁は、大都市の近海にあることも受難の要因のひとつであると思いますが、私はビトゥンの市場で買ったタカサゴにダイナマイト使用の痕跡をみたことがあります。いなかの海だからといって油断は禁物です。

ブナケン島周辺の海は、北スラウェシ観光の目玉商品のひとつであるので、環境保全については関係官庁もそれなりに気を配っていることと思いますが、具体的にどのような施策がとられているのでしょうか。関係業界、大学などの研究機関、行政機関の連携による

有効な施策を期待したいところです。

珊瑚礁にからめてとりとめのないことを書きましたが、最後に大事なことをひとつ。ブダイ類は珊瑚礁性魚類の代表的な魚ですが、その種類もたいへん多く、味も千差万別です。ビトゥンの市場でもめったにお目にかかることはありませんが、まちがって鮮度のよいヒブダイに出くわしたらどうするか。まず「こんな魚が食えるか」といいながら言い値の半分くらいに買い叩いて、それから急いでポリ袋と氷を手にいれます。速やかに冷やすことを考える。買った場所でエラはらをさばいてもらうなら間違っても肝をすてないこと。家に持ち帰ってよく砥いだ出刃包丁で五枚におろしラップをかけて冷蔵庫にいれます。そしてそれから大事に取っておいたキモをガス火で軽くあぶり、味噌、お酢、レモン、塩などで調味しながらキモをすりつぶす。最後の仕上げ。よく締めたヒブダイの身を刺身包丁などよく切れる包丁で刺身に切り、キモで和えます。もう最高! 酒は泡盛が最高。他の焼酎もよい。白ワイン、清酒も可。ウイスキー、ビールはいけません。刺身に切る段階で大事なことは、よく切れる包丁をつかうことです。私はそのためにピカピカに砥いだ出刃と刺身包丁を机の足元の道具箱にかくしてあります。ヒブダイは手に入れたけど包丁がない、という方は電話してください。包丁を持ってとんでいきますから。

入会の挨拶

国際交流基金
ジュニア専門家　　三浦雄一郎

６月に吉田先生の後任として赴任して参りました。素晴らしい景色と町並み、そしてなによりも温かいマナド人の笑顔に触れ、赴任前の不安も全て杞憂であったことがすぐに分かり、毎日の生活を楽しんでおります。

ここでの私の主な業務は、北スラウェシ州全域にある中等教育機関での日本語教育支援です。インドネシアは全国的に高校の第二外国語として日本語を扱う機関が日に日に増しており、中等教育に限れば世界でも日本語教育先進国であると言えます。北スラウェシはその中でも日本語科目の比重が高く、正課の選択科目としての日本語科目がある学校は高校だけでも約６０校に上ります。さらに、最近では中学校や小学校でも日本語を学ぶ環境が、少ないながらも着実に増えてきています。日本語教育関係者が地域の在留邦人に占める割合が高いことも、現在のここでの日本語教育熱の高さを表しているのではないでしょうか。しかし、高校での日本語教育の歴史はまだ浅く、その地位は安泰というものではありませんので、将来にわたって第二外国語の中核としてあり続けられるように—必修科目となればなお良いのですが—お手伝いをしていきたいと思っています。

その一方で、学習の成果を発揮する場が北スラウェシに少ないのはまことに残念なことです。義務教育や、義務教育の延長にある高校で日本語という異国の言葉を学んでも、おそらく大多数の学生は卒業後に日本語を使う機会がないかもしれません。でも言葉を使うことがなくても北スラウェシと日本は多くの点でつながりがありますし、文化的にも経済的にも結びつきは今後いっそう強くなっていくはずです。

多くの学生にとっては「日本語」という科目も退屈な授業の一つに過ぎないかもしれませんが、自分自身の学生時代を思い出してみると、恥ずかしながら私はそのことを批判できません。しかし、「日本語」の授業は単にことばを学ぶだけではありません。まだ若い北スラウェシの彼らが少しでも我々の国に興味を抱いてくれて、彼らの心に日本が残り、いつの日か双方に少しでも良い影響が生まれれば、私の業務の大半は達成されたといえます。

間接的なかかわりだけでなく、お互いに交流を図れる場や学んだことを仕事として生かせる環境があれば申し分ありませんが、それは一朝一夕に解決できる問題ではありません。

労働の場を創出することは私にはできません。でも交流の場なら何とかなるかも知れません。赴任中に少しでもそのような機会を提供できたらと思っています。みなさまにもご協力をお願いすることがあるかも知れませんが、その折にはどうぞよろしくお願いいたします。

任期のある短い滞在ですが、明るくて優しくて人懐っこいスラウェシの人たちと共に楽しく過ごせたらと思っています。

総領事館からのお知らせ

平成18年9月21日
在マカッサル日本国総領事館

鳥インフルエンザの感染拡大

１．９月７日、インドネシア保健大臣は、マカッサル市内（当地報道では具体的にJl.Maccini Tengahとされ、州議会議事堂に近いJl.Urip Sumoharjoの南側）に在住し、６月に死亡した１４歳の少女が、鳥インフルエンザ（Ｈ５Ｎ１）に感染していたことが確認された旨発表しました。当地報道によると、南スラウェシ州では、これまでに疑われたケースは７例ありましたが、いずれも陽性とはされなかったため、今回が初めて公式に確認された感染者であり且つ死亡者ということになります。少女は家禽と接触しており、また、鳥インフルエンザへの感染はまだ確認されていないものの、母親や姉も同じ時期に死亡したことが報じられており、市街地で発生していることから感染の拡大が懸念されます。９月１２日現在、インドネシアにおける感染者数は６５例、死亡者数は４９例となり、世界最多となっています。

２．在留邦人の皆様におかれましては、以下のような点に充分に注意を心掛けてください。
（１）鳥類に近づかないこと。特に養鶏場、鶏を扱う市場、観賞用鳥屋、家禽類飼育家庭及び動物園などへの不用意・無警戒な立ち寄りや接触を避けること。さらには、鳥類の死体、内臓、排泄物への接触を絶対にしない。
（２）鶏肉や卵を調理する際に加熱する（ＷＨＯによると、ウイルスは適切な加熱により死滅するとされており、一般的な方法として、食品の中心温度を７０℃に達するように加熱することを推奨しています)。
（３）念のため、人混みへの立ち入りは最小限にし、外出後には手洗い、うがいなどの通常の感染症予防対策を励行する。
（４）マスク等の準備及び必要に応じた着用を心掛ける。
（５）高熱、頭痛、全身倦怠感、呼吸器症状等が出たら、ためらわず最寄りの信頼できる医療機関で受診する。

３．今後の心構え

今後、ウィルスが変異して人から人への感染が始まると、短期間のうちに世界的に感染が広がるおそれがあると指摘されています。人から人への感染が拡大すれば、交通手段が大幅に制限されるなど、社会的に大きな影響が及ぶおそれもあります。皆様方におかれては、そのような状況に備え、以下の諸点を参考として、万一の時の際の心構えを持ち、今後の対応を検討しておいて頂くようおすすめします。

（１）当国における鳥インフルエンザ患者の治療体制

当国では、鳥インフルエンザの感染ないし感染の疑いが確認された場合は、政府による指定病院が取り扱います。

（２）鳥インフルエンザに対する治療の現状

（イ）人から人へ感染する新型インフルエンザが発生した場合、効果的な予防のためのワクチンは現存していないと考えられており、また、新型インフルエンザに対応するワクチンの開発には相当な時間がかかるといわれています。

（ロ）既存の一般的なインフルエンザの治療薬として処方される「タミフル」は、現存の治療薬としては最も効果が高いと考えられています。当国においては、「タミフル」は政府が一元管理することになっているため、一般市場での入手は困難な状況にあります（ただし、現在、当国政府による全国の指定病院には政府備蓄分から一定量について供給されています）。

（３）航空機等の交通機関

当国で人から人への感染が発生した場合、世界への蔓延を防ぐため、人の移動及び物資の流通が制限される可能性があり、場合によっては、航空機等の運航が停止する可能性があります。

（４）生活物資

物資の流通の制限により、生活物資の入手に支障をきたすおそれがあります。したがって、万一に備え、普段より基本的生活物資（水、米等）の備蓄をおすすめします。

（５）出入国の制限

いずれの国も水際での防疫体制を強化することから、出入国が厳しく制限される可能性があります（日本においても、防疫上の措置がとられますが、邦人に対し帰国自体を制限することはありません）。

（６）出入国の準備

（イ）いつでも航空券が購入できるよう、米ドル等現金を準備しておくことをおすすめします。（ロ）当国の滞在査証及び再入国許可等が失効していないかの確認、必要に応じて更新等の手配を準備しておくことをおすすめします。

４．鳥インフルエンザ指定病院

インドネシア政府は、全国各地の主要病院を鳥インフルエンザに対応するための指定病院としており、東インドネシア地域では以下のとおりです。

（１）北スラウェシ州　Malalayang 病院, Jl.Raya Manado Tanahwangko, Manado
tel:0431-853191/825635

（２）ゴロンタロ州　Prof.Dr.H.Aloe Saboe 病院, Jl.Taman.Pendidikan, Gorontalo
tel:0435-8212128/822753

（３）中スラウェシ州　Undata 病院, Jl.Suharso No.14, Palu

tel:0451-421270

（4）南スラウェシ州　Dr.Wahidin Sudirohusodo 病院, Jl.Perintis Kemerdekaan Km11, Makassar　tel:0411-584677

Andi Makasau 病院,Jl.Nurusssamawaty, Pare Pare

tel:0421-21823/22237

（5）南東スラウェシ州 Kendari 病院, Jl.Rumah Sakit Umum, Kendari

tel:0401-321432/321733

（6）マルク州　M.Haulussy 病院, Jl.Dr.Kayodo, Ambon

tel:0911-344871/351118

（7）北マルク州　Ternate 病院, Jl.Kesehatan, Teranate

tel:0921-21281

（8）パプア　Jayapura 病院, Jl.Kesehatan No.1, Dok.Ⅱ, Jayapura

tel:0967-533516/533616

なお、在インドネシア日本国大使館ホームページ（http://www.id.emb-japan.go.jp/）において、鳥インフルエンザに関する情報提供を行っていますので、以下のホームページと併せ適宜活用ください。

○厚生労働省ホームページ：鳥インフルエンザ関連情報

（アドレス：http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou02/index.html）

○厚生労働省ホームページ：新型インフルエンザ関連情報

（アドレス：http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou04/index.hmtl）

○検疫所ホームページ

（アドレス：http://www.forth.go.jp）

○感染症情報センターホームページ

「インフルエンザパンデミックＱ＆Ａ」、ＷＨＯ発表リポートの和訳文　他

（アドレス：http://idsc.nih.go.jp/disease/avian_influenza/index.html）

○ＷＨＯホームページ：鳥インフルエンザ発生最新情報他（英語）

（アドレス：http://www.who.int/csr/disease/avian_influenza/en/index.html）

○海外勤務健康管理センターホームページ

「海外派遣企業での新型インフルエンザ対策ガイドライン」

（アドレス：http://www.johac.rofuku.go.jp/news/060130html）

○在マカッサル日本国総領事館

TEL：０４１１－８７１０３０

FAX：０４１１－８５３９４６

編集後記

*石の上にも3年、水の中なら１０年。われらが玲子さんと恵理ちゃんには長年の苦労の甲斐があって明るい未来がひらけてきたようです。News Week の特集でとりあげる日本人といえば総理大臣かノーベル賞受賞者くらいのものと思っていたので驚きました。ご両名は当会の古参会員でありながら「タルシウス」の原稿をよこしてくれず、いつもにっこり笑ってごまかしてきました。今回むりやりに原稿の催促をしたところ、うれしいニュースがとびこんできたというわけです。「海外で活躍する日本人」というテーマで特集がくまれています。お二人には今後とも精進をかさねられて大きく羽ばたいてくれることを期待しています。

*明るい話題の反面、西方から「鳥インフルエンザ」という暗雲がひろがってきました。後藤総領事のご寄稿にもあるとおり、この国の保健衛生事情を考えた場合、この新型インフルエンザの発生は由々しい事態であるととらえるべきでしょう。マカッサル、ゴロンタロまで来た以上はメナードを中心とするミナハサ地方一帯すでに汚染地域にはいったと考えるのが妥当でしょう。会員の皆様にはマスコミ報道、総領事館便りなどに留意されることはもちろん、周囲の口コミニュースなどにも気を払われて、最善の防御対策をとられるよう願います。

*真珠養殖界のホープ今泉さんは、はじめて会ったとき「バリから来た今泉です。どうぞよろしく」、二度目に会ったときは目じりを下げて「結婚しました。どうぞよろしく」、三度目に会ったら更に目じりを下げて「子供がうまれました。どうぞよろしく」。エライ段取りのいいことだと感心していたら今度は「老後のためにタテル村に家をタテルことになりました」ときました。３０年後の老後のための家がどのようないきさつでタテラレルことになったか、詳しいことは本文をどうぞ。

*トモホンの上杉先生からおまけ付きの原稿が届きました。おまけの原稿のウエンディさんは、トモホンの日本語研修センターの学生つまり上杉先生の教え子です。本号掲載の文章は今年２月に書いたものとのことです。「今は漢字もたくさんおぼえましたからもっとうまくかけます。また書かせてください。」と本人の弁です。

前号(第１１号)上杉先生そして本号の三浦先生の寄稿文を読んで感じたことですが、日本語指導の先生方には「こどもたちが日本語を勉強してもこれが実際にどれほど役にたつのか」という懐疑、あるいはジレンマのようなものがつきまとっているような気がします。少し偉そうなことを言わせてもらいますが、先生方にはそのような枝葉のことを気にせずにバリバリやってください。日本人の国語教師が北スラウェシまで来て日本語の指導にあたるというのは、単に日本語の普及とか、あるいは実効性とかそのようなケチな次元の問題ではないのですから。

*東京の羽根井さんからシーラカンス関連レポートがとどきました。これは第１０号に掲載されたレポートの続編になります。シーラカンスの生の姿が撮られたことには(第２例目

であるにしても)私でも興奮します。私の本職は漁師でありますから興奮の質が問題でありますが、はやる気持ちは理性でなんとかおさえられるとおもいます。羽根井さんにはいつものように表紙絵もおくってもらいました。

東京の石野さん御前崎の川口さんからも貴重なレポートがとどきました。今後ともよろしくお願いいたします。

次号は来年4月発行のよていです。今回原稿が間に合わなかった方、連絡のつかなかった方は、次回によろしくねがいます。

長崎

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、

セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

（2014 年 04 月 20 日）

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。